

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和2年度学校評価 計画

学校名	基山町立基山小学校
1 前年度 評価結果の概要	・基山町小中3校で「小中一貫教育」を推進するために三部会を設置し、研究や実践をしてきた。学校教育目標「学び確かに 心豊かに 体たくましく」の達成のために、「宿題をしる」や「進んであいさつをする」、「歩いて登下校する」等の達成行動目標を掲げ、小中連携で取り組む合言葉の「す・み・そ・あ・じ」など、具体的に実践しやすい手立てが提案され、組織的な取組ができた。また、学力向上に向けて「スキルタイム」や「すくすくテスト」、「基山小漢字検定」を実施し、基礎学力の定着に取り組んだ。今後も「継続と徹底」を意識して学力向上を実現したい。その他の課題に対しては、「報告・連絡・相談」を基本に担当者や学年主任を中心としながら、管理職とともに課題解決にあたることができた。 ・学年主任や各主任を核とした組織的な指導体制をさらに強化し、ミドルリーダーの育成と若手支援を継続して行い、実践的な研究を深めていく。
2 学校教育目標	「きたえ やりぬき まなびあう」 ～自ら学び考え行動できる やさしさ・やる気いっぱい まなびあう基山っ子～
3 本年度の重点目標	・本年度、三部会から9つの専門部に組織改編し校内組織も関連付けることで、これまでの取組の精査を図るとともに、各専門部の機能強化と専門性を高めていく。 ・特別な支援を必要とする児童に対する支援体制や支援の在り方について見直しながら、指導者及び特別支援学級補助員を含む全職員が児童理解に努め、スキルアップしていく。

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価
---------------	------	--------

(1)共通評価項目								
評価項目	重点取組		具体的取組	中間評価		最終評価		
	取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師80%以上	・学習状況調査の結果等から、児童に身に付けさせるべき力を分析し、その力の育成を図るために、全職員で「授業づくりのステップ1・2・3」を参考にして指導改善を行う。 ・家庭学習の充実を、校内研究や校内研修を通して推進する。	B	・4月調査の調査分析を、基山町教育委員会で行っていただいた。6年生においては、見えてきた課題の補充を、朝のスキル等で行っている。 ・校内研究の算数科の授業実践や研修を通して「授業づくりのステップ1・2・3」による授業改善に取り組むことができた。 ・「家庭学習がんばり週間」を設け、保護者と共に取り組むことで、児童、保護者共に意識が向上した。	B	・「学力状況調査の結果では、5年生は国語科、算数科共に県の正答率を上回ったが、6年生は国語科は現状維持、社会科、算数科、理科においては昨年度の結果を下回った。今後は、単元テストや調査結果等を踏まえ、補充の時間を設定したり児童の学力の差に応じて少人数での指導を積極的に取り入れたりするなどの工夫が必要となる。 ・「授業づくりのステップ1・2・3」のリーフレット活用については、校内研究の研究協議会で、チェックシートの内容から本校の課題解決を図る授業改善に役立った検証を行う等、深い学びにつながる活用法について更に検討していく必要がある。 ・「家庭学習がんばり週間」では、その目的や結果等を踏まえた考察及び今後の手立てを記した「学習習慣たより」を発行することで、指導者や保護者の家庭学習への意識が高まった。協力体制も安定してきており、がんばりカードの回収率は98%に及ぶ。全校児童の達成率は9割を超えも経過となった。	
	○読書の習慣化と多読の推奨	○学校図書館の年間貸し出し冊数を、一人平均100冊以上にする。	・ファミリー読書(親子読書運動)を推進・密着し、読書の習慣化に取り組む。 ・図書館祭りを実施したり、多読賞を設けたりして、図書館利用について児童の関心を高める。 ・図書の見出しを常に2冊までできるようにし、多読を推奨する。	B	・年度当初計画していた6月と11月の「ファミリー読書月間」、11月に「しおりコンクール」図書館祭りが実施できた。 ・新型コロナウイルス感染症予防のため、昼休みの図書館利用を1学年のみと制限をしている。そのため、前年度よりも貸し出し総数が減っている。	B	・「ファミリー読書月間」「しおりコンクール」「図書館祭り」を予定通り実施できたことで、図書館に足を運ぶことや読書への意識付けができた。 ・昼休みの図書館利用を1学年のみと制限をしたことで、前年度一人約60冊だった貸し出し冊数が、今年度は約41冊と減ってしまっ	
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	●互いのよさを認め、共に高め合う道徳の授業実践や学級経営を通して、児童の自己肯定感を高める。	・全ての学級が、授業参観等を活用して、「ふれあい道徳」を実施する。 ・一人一人がよさを発揮し、互いのよさを認め合える授業や学級経営を行う。 ・ST等による道徳授業に関する研修会や出前授業等を行うことで、魅力のある道徳の授業作りに取り組む。	B	・今年度、新型コロナウイルス感染症予防のため、授業参観が1回しか実施できていない。そのため、「ふれあい道徳」についても、全学級が実施できていない。 ・道徳科や人権集会での標語づくりを通して、お互いを認め合う授業づくりを行っている。	B	・今年度新型コロナウイルス感染症予防のため、授業参観が1回しか実施できていない。そのため、「ふれあい道徳」は全学級の半数ほどの実施にとどまった。 ・道徳科や人権集会での標語作りを通して、お互いを認め合う授業作りを行ってきた。	
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	●いじめの未然防止のためのアンケート等を実施するとともに教育相談活動を充実させる(組織対応ができていると回答した教員80%以上)。 ・SC、SSWの活用を推進する。	・Hr-QUの活用と、いじめに関するアンケートを年間2回実施することで、児童の実態を把握し、結果の分析を基に、学年、学級経営に生かす。 ・SC、SSWの活用、保護者、地域、専門機関との連携強化を図り、生徒指導や教育相談体制の整備を行う。	B	・「楽しい学校にするためのアンケート」を毎月1日に実施し、いじめの早期発見・早期対応に努めた。いじめに至らない相談事も対応することができ、児童の不安を解消することにつながった。 ・SC、SSWを活用し、保護者、職員、関係機関との連携を図ることができた。	B	・「ハイパーQUの結果や毎月行ったいじめアンケートの取り組みにより、児童の実態を把握することができ、一人一人に対応した指導を行うことができた。 ・SC、SSWを活用し、保護者、職員、関係機関との連携を図ることができた。	
	◎児童が夢や目標をもち、その実現に向けて意欲的に取り組むとするための教育活動	◎社会科や総合的な学習の時間等、郷土を愛する児童の育成を目指した、カリキュラム・マネジメントを行う(「将来の夢や目標をもっている」について肯定的な回答をした児童80%以上)。	・「ふるさと基山の歴史」や「佐賀語り」「佐賀巡り」等を活用した授業に取り組む。 ・地域の教育資源や人材等を活用した体験活動や表現活動を実施する。 ・小中の系統性をたもてた「きやま学」を実践する。	B	・各学年の年間学習指導計画に基づき、地域の教育資源や人材を活用した学習や体験活動を行っている。ただし、新型コロナウイルス感染症予防のため、いつまでなかった学習も出てきた(お茶、米、福祉、歴史など)。 ・「きやま学」については、系統表を作成中。	B	・年間学習指導計画を基に、地域の人材を活用して演武などの学習を行った。できなかった学習もある中で、学習の成果を校内や地域に発信することができた。 ・「きやま学」については、小中での年間学習計画を作成したことで繋がりを確認することができ、教師が見通しをもつことができた。	
●健康・体づくり	●運動習慣の改善や定着化	・保護者と連携協力して児童の外遊びを奨励し、体力の向上を図る。	・外遊びの奨励や「さがんキッズ」の取組への奨励をしていく。	C	・新型コロナウイルス感染症の影響で、「さがんキッズ」の取組はできていない。	C	・今年度は、積極的な取り組みができなかったが、新しい生活様式を踏まえた体力づくりを目指したい。	
	○食育教育の充実	○年間の給食残棄率を5%以下にする。	・栄養教諭と食育教育担当職員が中心となり、学級担任との連携した食育指導を展開する。	B	・食育担当職員と学級担任が連携し、月目標をもとに食育を行っている。また、委員会活動で「給食放送」を行い、給食の献立や栄養について理解を促した。	B	・「審美」や「かむこと」について学級担任と栄養教諭がTTで授業を行った。食育担当職員と学級担任が連携して月目標をもとに食育を行った。また、委員会活動で「給食放送」を行い、給食の献立や栄養について理解を促した。 ・1学期の残棄率は4.4%であったが3学期は2.0%	
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●会議や事務の効率化を図り、教職員が児童と向き合ったり、教材研究をしする時間を確保する。	・会議や連絡会は、資料をデータ化し、事前に確認できるようにしておき、会議や連絡会の時間の削減を行う。 ・共有フォルダにデータを保存し、共有化を図り、効率的に業務を遂行する。	B	・会議資料や連絡事項について、事前にデータで提示し、会議の時間の削減を図ったり、会議の回数を減らしたりすることで、教材研究や事務の時間を増やすことができている。	B	・共有フォルダにPDFで資料を格納することで、全員が閲覧しながら会議等を進めることができ、ペーパーレスにもつながった。特に、年度末には生定期処理等に多くの時間を確保することができた。	

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目

評価項目	重点取組		具体的取組	中間評価		最終評価	
	重点取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果
○特別支援教育	○特別支援教育の充実	○職員の共通理解と協力体制の確立を図る。 ○支援が必要な児童の実態を把握し、個別的教育支援計画、個別の指導計画を作成し、随時更新して、指導に生かす。	・教職員を対象とした特別支援教育に係る研修会や保護者を対象としたふれあい学級や学びの教室の運営に係る説明会を実施する。 ・関係機関との連携を図り、保護者・児童の教育的ニーズや願いを把握し、教育的な観点から適切に対応する。 ・ユニバーサルデザインの推進に向けて、「学習環境」「授業」「人的環境」等のユニバーサルデザインについて、講師招聘等を行い共通理解を図る。	B	・教職員を対象とした特別支援教育に係る研修会を行い、児童の見取りについて学んだ。保護者を対象としたふれあい学級や学びの教室の運営に係る説明会の代わりに個人面談で説明した。 ・関係機関との連携を図り、保護者・児童の教育的ニーズや願いに沿う対応を心掛けている。 ・ユニバーサルデザインの推進に向けて、「学習環境」「授業」「人的環境」等の充実を図るため、町教委主催の特別支援教育研修に多くの教職員が参加し、資質向上に努めている。	B	・1学期に講師を招いて全職員と特別支援学級の研修と、特別支援学級担任及び支援員の研修を行い、児童の見取りや今後の支援の在り方、評価の仕方、合理的配慮について学び、職員の見通しと協力体制ができた。 ・毎週、特別支援学級特約員とのミーティングを行い、児童一人一人の情報を交換し、児童の実態を把握し、今後の支援について改善を図ることができた。 ・道徳科や専ら専ら道徳支援事業を通して専門機関との連携を図り、保護者・児童の教育的ニーズや願いに沿う対応を心掛けた。 ・ユニバーサルデザインの推進に向けて、「学習環境」「授業」「人的環境」等の充実を図るため、町教委主催の特別支援教育研修に多くの教職員が参加し、資質向上に努めた。 ・全職員で、配慮を要する児童の情報を共通理解して、関心のある児童に適切な支援を考慮、保護者等へ届けた説明を心がけ、「ふれあい学級」や「連絡教室(まなび)」についての理解を深め、入級に向けた取り組みができた。
○基本的な生活習慣の定着	○あいさつ、返事、廊下歩行、スリッパ並べの定着	○「す・み・そ・あ・じ」を合言葉にして、あいさつ、返事、正しい廊下歩行、はきものをそろえる、ができる児童を80%以上にする。	・月毎の「生活目標」を「す・み・そ・あ・じ」に焦点化し、毎学期繰り返して取り組むことで指導の徹底を図る。 ・「基山っ子」(学校だより)や全校集会等で児童の頑張りを肯定的に評価し、あいさつ、時間の意識、はきものそろえを定着させる。	B	・月ごとの生活目標の掲示、放送を行った上で各学級担任を初めとする全職員による指導を行っている。学期に1度行っている「学校生活がんばりカード」への取組では、1学期に比べて2学期は全項目平均で3ポイント以上向上した。	B	・「学校生活がんばりカード」への取り組みにより、学年末もおちついて生活できていたことが分かる。あいさつ、時間の意識、はきものそろえについては、年度当初に比べて向上した。

●・・・県共通 ○・・・学校独自 ◎・・・志を高める教育

5 総合評価・ 次年度への展望	・基山町小中3校で「小中一貫教育」を推進するために9部会を設置し、研究や実践をしてきた。3校共通の目標である「きたえ やりぬき まなびあう」の達成のために、「宿題をしる」や「進んであいさつをする」、「歩いて登下校する」等の達成行動目標を掲げ、各部会から合言葉の「す・み・そ・あ・じ」など、具体的に効果的な手立てが提案され、組織的な取り組みができた。また、学力向上に向けて「スキルタイム」や「すくすくテスト」を継続して実施し、基礎学力の定着に取り組んだ。今後も「継続と徹底」を意識して学力向上を実現したい。 ・9部会については、今年度、リモートでの分散会議を1回行っただけであったので、次年度は開催の仕方を吟味しながら、各専門部の機能強化と専門性を高めていく。 ・学年主任や各主任を核とした組織的な指導体制をさらに強化し、ミドルリーダーの育成と若手支援を継続して行い、実践的な研究を深めていく。 ・特別支援教育では、今年度、コアリーダーによる研修会を多く行っていただいた。次年度も、継続した研修を維持しつつ、特別な支援を必要とする児童に対する支援体制や支援の在り方について見直ししながら、指導者及び特別支援学級補助員を含む全職員が児童理解に努め、スキルアップしていく。
--------------------	--